

月刊

書字文化

～日本書字文化協会機関紙 No85～

令和3年（2021年）



今年の合い言葉は「全肯定」



謹
賀
新
年

編集長・渡邊啓子

一般社団法人日本書字文化協会(書文協)

本部 〒164-0001 東京都中野区中野 2-11-6 丸由ビル 3階

電話 03-6304-8212 / FAX 03-6304-8213

メール info@syobunkyo.org

ホームページ <http://www.syobunkyo.org>

新年ご挨拶

令和3年正月
一般社団法人日本書字文化協会
代表理事・会長 大平 恵理

自己を全肯定する文字表現だからこそ今！



明けましておめでとうございます。

今年も書写書道の学びをご一緒に続けられればと願います。困難な状況は続いていますが、備えを万全にして学びは止めずに参ります。

書写書道を学ぶのは、書く技術だけを身に付けるためではありません。書写書道は表現です。表現は自己を全て肯定するところから始めるべきです。運筆、字形そして審査成績だけにとらわれるのではなく、表現する自分を磨くのだ、ということをしっかり胸に刻んで学びを続

けたいと思います。

文字は万人のための公共的財産です。書文協は2010年（平成22年）2月、書写書道を長く研鑽してきた者たちが東京都中野区内に設立しました。今年で11年目になります。非営利の法人として活動してまいりました。基礎固めの時期とも言える最初の10年を経て、続く10年は大きく飛躍していく年にしたいと思います。

書文協の仕事の第一は、書写書道の指導方法（メソッド）の研究開発です。このため教え方の研究を続けています。得たメソッドは、テキストの発行を中心に世に還元するように努めています。テキストに基づく全国検定試験、その結果に基づく段級の付与も大事な事業です。指導者の養成を目的に指導者ライセンス（資格）認定試験を行っています。中野での中央講習会、各地の団体の要請による講習会も開催します。時節柄、開催を中止することも多いのですが、ご希望の団体はお声掛けください。

新年の計としては、新たな検定試験の実施を検討しています。書写書道を生涯教育にすることを目指したものになります。また、新年の早い時期に、ホームページの改訂を実施。春と夏にはあらたな市販本の発売を大手出版社からオファーされています。

防疫には万全を期します。こんな時だからこそ、皆様、一緒に困難を乗り越え、さらに発展していこうではありませんか。



書文協中央審査委員会副委員長
辻 春葉（眞智子）

書写書道に親しむ女性に期待



明けまして、おめでとうございます。

コロナ禍の中、新しい年を迎えました。蘭亭序風に言えば「令和三年歳は辛丑に有り」となります。

「辛（かのと）」は同音の「新」に通じ、植物が枯れて新しい世代が生まれ出ようとする意がさるそうです。With コロナから after コロナへと移っていかねばならない今の世界にとって、とてもふさわしい干支（えと）だとは思いませんか。ウイルスの終息を望むのは不可能かもしれませんが、あらゆる人智を結集して、コロナ禍は終息させなくてはなりませんね。

子供の頃「干支」を何故「えと」と読むのか不思議でした。漢文の授業で先生から十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）と十干（じっかん）（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸）の組み合わせで、最小公倍数の六十年で一回りし、それが「還暦」。さらに十干と組み合う五行（ごぎょう）（木・火・土・金・水）に兄（え）と弟（と）がある（例えば 甲・・・木の兄（きのえ） 乙・・・木の弟（きのと）と教えていただき、暦一つをとっても深い意味合いがあるのだと感動致しました。そして、日本史で馴染みのある「壬申の乱」や「戊辰戦争」呼称の謂れ、甲子（きのえね）の年に造営されたから甲子園球場と呼ばれることなどが理解できました。

この原稿を執筆しながら十二支の中に仔を産み育てていく哺乳動物の多いことに、ふと気づきました。母親が乳を与え慈しみ育てることは、人間も動物も同じです。日々成長していく姿に身近で接していただける母親は何と幸せなのでしょう。こんなにも素晴らしい時間を持たない父親は可哀そうだと思いますが、私は子育てをしていました。

男女同権が提唱されて久しくなりますが、まだまだ社会は男性中心に回っています。だからと言って男性と同じになろうとするのではなく、女性としての特質を活かした貢献をし、その価値を男性も認めることが本当の男女同権なのではないでしょうか。

令和は、女性にとっては有難く飛躍できるチャンスが多い時代の予感がします。若者達をとり巻く日本の社会は大きく変化しました。現在、女性の社会進出はめざましく、男性に伍した活躍が出来、家庭内での立場も強いものになりました。夫と共に働く妻への思いやりと感謝を示し、子育てはもとより家事への強力など当たり前になってきました。女性特有の我慢強さで家庭の土台となり、その上で二〇二一年、皆様の活躍を願っております。

辻 眞智子先生経歴

1944年、岐阜市生まれ。東京学芸大書道科卒。小・中教諭を経て1973年、夫の大阪転勤を機に教諭を退き、20年間年ほど子育ての傍ら、生涯教育の場で書道続ける。文教大、聖心女子大などの講師を歴任。春葉舎主宰。日本武道館編集顧問。全国書教研連盟副会長。

編集部から

敬愛する書文協顧問であられた故・井上孤城先生のご意見で、辻先生に書文協のかなめ「中央審査委員会」の副委員長を引き受けていただいた。井上・辻先生は故・氷田光風先生の合弟子です。類まれな力量を知り尽くした井上先生が「女性の多い書写書道の世界には女性のリーダーも必要だよ。男には分からん世界がある」と言われたことを鮮明に記憶しています。

十二支を包む陰陽五行説を述べられた冒頭の部分は、言葉を大切に書文協として、皆さんにぜひ知っていただきたい世界です。そこからさらりと仔を育てる哺乳類の話に移る巧みさ、書写・書道の言葉を一度も使わず、広く女性の活躍への期待を書き切ったことも大変印象的です。お忙しいところを寄稿のお願いした上に「書写書道に親しむ女性に期待」の題名は編集部でつけさせていただきます。辻先生の言われるように、令和3年が女性躍進の年であることを期待しています。 文責・谷口泰三



第9回伝統文化大会開催について

締め切りは1月22日（金）

全国書写書道伝統文化大会（全国年賀はがきコンクール、全国学生書き初め展覧会）は令和3（2021）年1月22日応募締め切りで開催されます。書文協主催、公益財団法人文字・活字文化推進機構共催、文部科学省、小・中・高校長会、全日本書写書道教育研究会後援。

実施要項・指定課題、解説・お手本は書文協ホームページに掲載されています。フロントページの中ほどの横タスクバーの右から2つ目「大会」にカーソルを当てますと、メニューがプルダウン表示されますので「伝統文化大会」をクリックすると表示されます。

時節柄、状況で出品が遅れそうなときは、書文協本部にご相談ください。

総合大会コメント集

第9回全国書写書道総合大会の「ひらがな・かきかたコンクール」「全国学生書写書道展」「全国硬筆コンクール」（応募総数 5962 点）で、特別賞受賞者は 123 人でした（書文協ホームページの月刊書字文化 12 月号に全特別賞受賞者リスト掲載）。このうち、文部科学大臣賞、大賞、中央審査委員会賞を受賞した 11 人の方に、受賞の喜びコメントを寄せていただきました。上位特別賞を受賞された方々は書文協から所属園・学校、地元教育委員会等に授賞の報告をしました。

各コメントは月刊書字文化用ではスペースの都合で短くしました。主に先生や家族らへの感謝の言葉などを割愛しました。文責は編集部にあります。コメントの原文は、近くホームページの大会結果欄に掲載の予定です。

<総合の部>

❖文部科学大臣賞 大阪府吹田市立岸部第二小学校 5 年 米田 琴音

祖父母らのいる九州の風景をイメージして書いた

今年はコロナのえいきょうで休校になったり、おけい古のやり方が変わったり、今までのように練習できなかつたように思います。でも、その時自分に出来ることを精一ぱいがんばりました。

今回の毛筆の課題「里山の秋」を書く時、文字の形や筆の運び方に注意しました。そして心の中で、今年遊びに行くことができなかつた、祖父母やいとこのいる九州の風景をイメージしながら書きました。作品に心をこめることができました。

私は努力すれば必ず良い結果につながると信じています。これからも、今の気持ちをわすれずに、良い作品を書いていきたいです

<ひらがな・かきかたコンクール>

❖文部科学大臣賞 福岡県・花畑幼稚園年中 緒方 こはる

これからもがんばる（こはる）

去年は銅賞で悔しかったので、この賞をもらえてとても嬉しかったです。これからももっと練習を頑張りたいと思います。

成長に感無量（母）

昨年、年少で書き方教室に通い始め、最初は線を一本書くこともままならない感じでしたが、一年が経ちこのような大きな賞をいただけるまで成長したのかと思うと、非常に感慨深いものがあります。これも、本人の何事にも真面目に取り組む姿勢と、松本先生のご指導のお陰だと思えます。これを励みにこれからも頑張ってもらえたらと思います。この度は本当にありがとうございました。

❖文部科学大臣賞 東京都 足立区立伊興小3年 土田 梨乃

祖母のように上手になりたいと

祖母が字の先生ということもあり、硬筆は2歳の頃から習っています。幼稚園の頃は、難しく練習をしながら泣いてしまうことも ありましたが、祖母のようなきれいな字が書けるようになりたいと思い、たくさん練習を してきました。

学校では、かきかたや書道の時間だけでなく、国語や算数など、どの教科のノートも連絡帳も全て丁寧を書くようにしています。普段の生活でも丁寧な字を書くことで、年々、少しずつ大きな賞を受賞する機会が増えてきて、この度目標としていた賞を受賞することができたので 毎日の習慣の大切さを知ることもできました。

❖大賞 福岡県・平野保育園年長 馬場 美咲

書くことが好きになった (美咲)

頑張った所は、とめはらい、くの途中でとまり、最後にはらうところ。みんなに字がキレイと褒めてもらえて嬉しいです。書き方の教室に行ってから字を書く事が好きになりました。

これからも頑張って (母)

書き方教室を始めた時は、ひらがなを読むことさえ出来なかったのが、本人の努力と先生方のご指導のお陰で、賞を受賞する事が出来ました！！

書いたり読んだりするのは好きみたいなので、賞をもらった喜びを忘れずに、これからも頑張って続けて欲しいです！

<全国学生書写書道展>

❖文部科学大臣賞 刈谷市立東刈谷小6年 山内 絢良

書は自らの表現

わたしは年長の時から小川学園にお世話になっています。小学校に入り周りの友達に「すごく上手だね」と言ってもらえるようになりました。

教室にはもっと沢山上手な先輩方がいてわたしは自分に自信を持っていいものか分かりませんでした。しかし、五年生位からもっときれいな字が書きたい、と思うようになり、書に向かう姿勢も意識するようになりました。先生が常々「良い作品を書きたいと思えば書と向き合っている子が良い作品をつくるよ」と言っていました。

わたしの中で「書」は自らの表現であり、ほこれるものと感じています。これからも自分と向き合って書を高めていきます。



❖文部科学大臣賞 東京都・宝仙学園高1年 峯田 彩世

草書にチャレンジして

今回は初めて草書に挑み、高校生として表現の自由を意識しながら作品を仕上げました。全てが初めてだったので、まず字の大きさやかすれ具合に着目し、全体のバランスを見ることをしてみました。しかし最初につける墨の量や文字の大きさの配分などが難しく、とても苦戦しました。練習を繰り返し、学んだことは初めは多すぎるくらいに墨をつけ、かすれるところも表現のひとつとして思いっきり書くということです。また、墨をたくさんつけて書いた文字は小さめに書き、かすれが多い文字は大きく書くことで文字のバランスや一文字一文字の字の主張もうまくバランスがとれることを学びました。

次の機会にはかな文字にも挑戦していきたいと思っています。

❖大賞 三重県川越町立川越中2年 林佑衣

幼稚園から頑張ってきた

私は年中の頃から書道を始め、これまで続けてきたからこそ、頂けた賞だと思っております。

最初にこの課題を書いたときは、大きさや、間隔、行書の筆の運び方が難しく、バランスがあまり良くないものでした。しかし、先生が丁寧に教えて下さったり、たくさん練習を続けていったりするうちに、納得出来るものを書けるようになりました。幼稚園からコツコツと頑張り、本当に良かったと、改めて、強く感じました。

❖中央審査委員会賞 東京都・光塩女子学院初等科3年 平野 理央

先生の沢山のアドバイス守って

この度は「中央しんさ委員会賞」という素晴らしい賞に選んでいただきありがとうございました。先生から「米の字は一画目と三画目はつけてはいけない」、「づの字はカーブする時に少し細くする」、「くの字は線を少し反るようなイメージで」、「りの字はたて長に、字と字の間かくを気をつけてね」など、たく沢山のアドバイスをもらいました。

さらに、先生がいつも「もう一回、もう一回」と言って何度も練習させてくれるので、気がつくとなんまりも書いています。先生方のお習字のレッスンのおかげで、何かに取り組む時の集中力もつきました。

これからもなるべく休まず、書道の練習をしたいと思っています。



<全国硬筆コンクール>

❖文部科学大臣賞 福岡県春日市立春日東小6年 真島 舞子

三つのことに気をつけています。

一つ目は字の入れ方です。先生の注意をよく聞いて、練習しました。初めのときは、入れ方に注意しすぎて字のバランスが悪くなってしまいました。しかし、練習のときに毎日気をつけて書くと慣れてきて字のバランスも良くなりました。

二つ目は、濃く書くことです。えんぴつをとぎすぎないように注意したり、姿勢を正して、右手に力を入れるように気をつけたりしました。

三つ目は、行にまっすぐ書くことです。初めは、くねくねしていました。しかし、先生から「行の真ん中に印をつけて、書くといいよ」と、教わって、そうして書くと上手に書けました。

❖文部科学大臣賞 大阪市立夕陽丘中3年 保田 はる

この賞を目標にしてきた

教室に通い始めたときから、いつかがこの賞を頂けることを目標に一生懸命練習してきました。それなので教室の先生から受賞のお知らせを聞いた時は、今まで味わった事のない驚きと嬉しさでいっぱいでした。

なかなか上達しなくて、心が折れそうになった時もありました。そんなときは文部科学大臣賞を取る、という目標を思い出して練習の励みにしていました。

今回の練習では、行書を練習してきたことを十分活かした作品になりました。課題の内容も、今まで経験してきたことだったため、より気持ちを込めて書くことができました。これからも、初心を忘れずに成長し続けていきます。

❖中央審査委員会賞 埼玉県・県立春日部女子高3年 田口はるな

悪い癖に気をつけて書いた

画数の多い文字の細かい部分をおざなりにしてしまうこと、書き進めていくにつれて段々書くスピードが速くなって雑になってしまうのが自分の悪い癖でした。今回の作品は、どの部分も同じくらい丁寧に書くこと、最後の1文字まで気を抜かないことに重点を置いて書き上げました。

また、課題が古典の授業で教わった文章だったこともあって、いつも以上に楽しんで書くことができました。今回頂戴した賞を励みと自信に変え、より良い作品が書けるようこれからも努力していきます。本当にありがとうございました。

